

第2次東日本大震災復興支援ボランティア

参加者の想い・感想



七ヶ浜町菖蒲田浜で津波犠牲者を悼み全員で黙祷



期間：10月6日(木)～8日(土)
場所：宮城県宮城郡七ヶ浜町



連 合 長 野

《目 次》

P1～ 参加者名簿

P2～ 行動スケジュール

P4～ 参加者の感想

P11～ 多賀城市社協DVDのメッセージより

P13 あとがき

第2次復興支援ボランティアの参加者名簿

	構成組織・地協名	所属組合名	氏名
1	JAM甲信	大和電機工業労組	中谷 幸二
2		大和電機工業労組	加藤 美保
3	電機連合	長野日本電気労組	原 忠博
4	電力総連	中部電力労組	小林 正雄
5		中部電力労組上田支部	小林 秀樹
6		中部電力労組上田支部	佐藤 実
7		中部電力労組	藤森 英久
8		東京電力労組松本総支部	竹内 靖
9	サービス・流通連合	西友労組中部支部	渡辺 茂男
10	全電線	東京特殊電線労組	岡宮 得家
11	上伊那地協	自治労伊那市職員労組	前田 是幸
12	飯田地協	JAM多摩川精機労組	小林 俊亮
13		UIゼンセン同盟旭松食品労組	佐野 嘉彦
14		自治労飯田市職員労組	遠藤 雅子
15		自治労飯田市職員労組	林 開
16	松本広域	電機連合富士電機グループ労連	進藤 篤彦
17	連合長野	事務局	成沢 勇次
18		事務局	戸井田 学久

第2次復興支援ボランティアの行動スケジュール

第1日目 10月6日（木）

- 4：00 諏訪（おぎのや諏訪店）発
- 4：30 松本（合同庁舎前バス停）発
- 5：20 長野（おぎのや長野店）発
- 5：50 坂城（千曲川さかきPA）発
- 6：20 佐久（佐久乃おぎのや）発
- 車中にて昼食
- 12：30 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着
- 13：00 **作業開始→七ヶ浜町菖蒲田浜の個人宅にて基礎部分の泥出し**
- 15：30 **作業終了→七ヶ浜町災害ボランティアセンター（用具の片付け）**
- 17：00 仙台市内ホテルメイフラワー仙台着
- 18：30 団結会

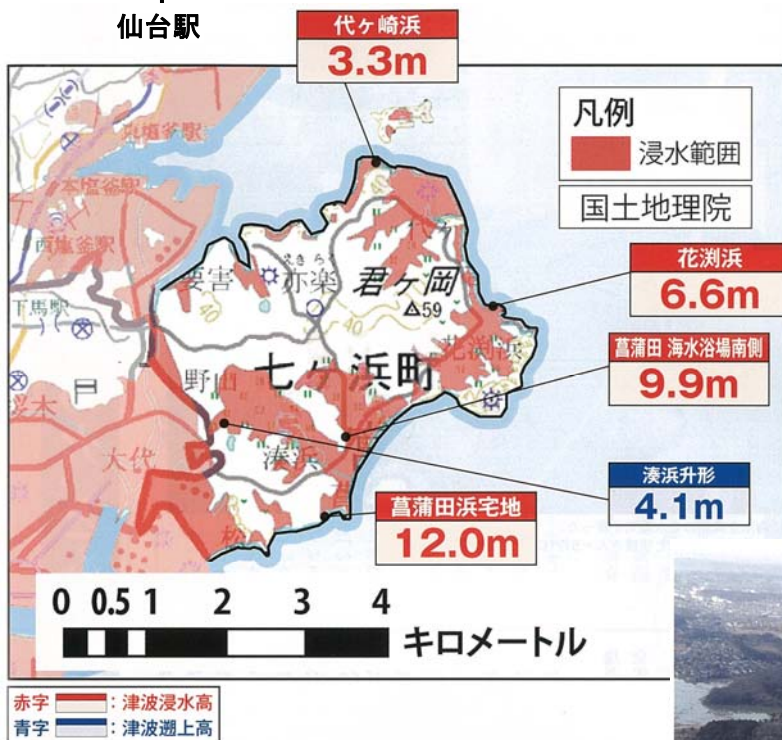


第2日目 10月7日（金）

- 8：10 ホテル発
- 9：00 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着
- 9：30 ボランティアセンターでマッチング・ミーティング
- 10：00 **作業開始→菖蒲田浜の林道（遊歩道）整備**
- 12：00 昼食休憩→七ヶ浜町災害ボランティアセンター
- 13：00 作業再開
- 15：00 **作業終了→七ヶ浜町災害ボランティアセンター（用具の片付け）**
- 17：00 ホテル着（各自夕食）

第3日目 10月8日（土）

- 8：00 ホテル発
- 9：00 七ヶ浜町災害ボランティアセンター着
- 9：30 **作業開始→蒲田浜の林道整備の続き**
- 12：00 **作業終了、海に向かい参加者全員で黙祷→七ヶ浜町災害ボランティアセンター**
- 12：30 七ヶ浜町災害ボランティアセンター発
- 車中にて昼食
- 19：00 佐久乃おぎのや着
- 21：10 おぎのや諏訪店着



◎七ヶ浜町の被害状況

(10月25日17時現在)

死者	70人
行方不明者	5人
全壊家屋	729棟
半壊家屋	460棟
一部損壊家屋	1,067棟



右下の菫蒲田海水浴場付近は、密集していた家屋が跡形もなくなった(七ヶ浜町提供)

第2次復興支援ボランティア参加者の感想

[JAM甲信大和電機工業労働組合・中谷 幸二]

七ヶ浜町内に入って最初の印象は、少しの高低差が命運を分けたなということでした。

ほんの数メートル高い位置に家があったところは、通常通りの生活をしていましたが、低地にあった家は土台を残して全て流されていました。

ボランティア活動として、土砂の撤去・作業道路の整備を行いました。土砂の中にガラスの破片等が大量に含まれており、1坪程度の土砂を撤去するのに2時間程度掛かり、これから元通りにするのにどれくらいの時間が掛かるのだろうかと感じました。



作業現場からボランティアセンターに帰る道路の脇の駐車場や畑は大きな瓦礫は除去されていましたが、ガラスの破片はまだまだの状態でした。

今回、ボランティア活動に参加させて頂き作業する中で、まだまだ人手が必要なことが体感できました。今回のボランティア作業で感じたことを持ち帰り、家族・友人・会社・職場などで、多くの人に伝えていけたらと考えております。

[JAM甲信大和電機工業労働組合・加藤 美保]

東日本大震災から、七ヶ月経ち当初からボランティアをやりたいという思いが強かった時に、今回のお話があり有り難く思っています。復興支援ボランティアは初めての参加もあり不安だらけでした。

宮城県七ヶ浜町に近づくにつれ、テレビで見たような景色を目の当たりにして、バスの中から言葉もでませんでした。七ヶ月が経った今でも、震災の影響、更に台風の影響で状況は悪化していました。線路が途中から無くなっていたり、家の基礎だけが残っていたり、標識が津波で押し曲がっていたり・・・思っても見なかった光景でした。

ボランティアセンターに着くと、地元や各地から来ているボランティアの方々が沢山いました。

まず一日目は、家のヘドロ撤去作業。スコップで、床の下の土砂・ヘドロ撤去を行いました。この作業で一番大変だったのは、土砂の中にガラス・食器などの破片があり、それを分別してから土嚢に入れる事でした。普段使われていたのであろう食器・コップ等が粉碎されていくつもいくつも出てきました。私はこの光景がとても切なかったです。海が無い長野県民である私は、普段生活をしている家が地震後の津波で襲われて無くなるなんて事を考えた事がなかったからです。改めて地震の怖さ・



津波の恐ろしさを感じました。

二日目・三日目はジャリを運び林道作りを行ないましたが、かなりの肉体労働でした。スコップを持つと無我夢中で砂利を運び気付くと手には豆が潰れていました。

実際に運んだ砂利で道が出来ていくのを見たらとても嬉しくなりました。

東北の地で起きた地震でしたが、同じ日本で起きた災害に私は今ある力を出し切って少しでも役に立ちたいと、思い頑張りました。

決して楽な仕事ではありません。それは覚悟していましたが、想像以上に大変でした。しかし、一人ひとりの力が復興に繋がっていくのが実際作業を行っていく中で分かりました。もっともっと多くの方が復興に向け手助けをする事が大事な事だと痛感しました。

現地の方の言葉の中に“まだまだ日本も捨てたモンじゃない。これくらいは乗り切れる”と。私は泣きそうになりました。その言葉を受け、これからは私は復興に向け少しずつでも、役に立てることをしていきたいと改めて思いました。

私は今までちょっとでも大変な事があると楽をしてしまいがちでしたが、今回はそういった自分の甘さに耐える事も出来て、復興支援ボランティアに参加し自分を成長することが出来、よかったと思います。

また、今回このようなボランティアに参加でき学んだ事を一人でも多くの人に伝え、一人でも多くの方が、ボランティアに参加し復興に繋げていって欲しいと思います。今回は非常に良い経験が出来ましたことをお礼申し上げます。有難うございました。

[電機連合長野日本電気労組・原 忠博]

5月には、福島県いわき市でのボランティアにも参加させてもらったので2回目のボランティアとなりました。

震災直後から自分に何かできることはないのか？と思っていたのと、まだ復興支援ツアーの募集があるということは作業に人手が必要なのだろうと思い、今回も申し込みをさせていただきました。



住宅基礎部の土砂撤去では、大きな瓦礫はすでに撤去されていたのですが、以前はあれだけの住宅等があったのに基礎部分だけになってしまっていたのを目の当たりにすると、また切ない思いがこみ上げてきました・・・

松林の瓦礫撤去の為の車道整備では、これができることによって最終的に松林を復活させることができるのだと思うと慣れない作業にも力が入りました。みなさんが同じ気持ちだったようで作業効率も非常に良かったと思います。

地元の方は「来年には海開きをしたい」という強い思いでしたので、海開きができるようになった暁には、またあの菖蒲田浜に行ってみたいと思います。

[電力総連中部電力労組・小林 正雄]

今回私は、生まれて初めて「復興支援ボランティア」というものに参加しました。

3月11日の東日本大震災発生以降、義援金や寄付金といった形の協力はしていたものの「他に何か出来ないのか？現地で直接被災者の役に立ちたい！！」と言う思いが日々強くなっていましたが、一人では何も出来ずにいました。

そんな中、組合情報で連合長野の東北復興支援ボランティアがあることを知り、私は迷わず申し込みました。

ボランティア作業は、津波被害にあった海岸の、公園整備のための伐採と道路造りでしたが、全て

が新鮮でとても充実した3日間を過ごすことが出来ました。

今回はこのようなボランティアツアーを計画していただき、参加させていただき事に心より感謝申し上げます。

また、今後も連合ボランティアツアーが継続的に開催されることを願っております。

[電力総連中部電力労組上田支部・小林 秀樹]

東日本大震災から七ヶ月が経過し、被災地の情報が徐々に少なくなる中、それでも「自分の目で見たい感じ、何か役に立ちたい」その思いで参加をさせていただきました。



津波で流された家の、基礎部分に溜まった泥を掻き出す作業を行いながら、もし自分が被災した立場であったらとの思いの中、私たちにできることは無心に作業をさせていただくことであり、少しでも役に立てたとの思いと、まだ多くの方が同じ思いで、ボランティアに参加されていることに安心しました。

そして、この思いを大切にするとともに、子供達に伝えることも私たちの役目とすることが出来ました。ありがとうございました。

[電力総連中部電力労組上田支部・佐藤 実]

1日目の昼頃、あのテレビで見た被災された景色が目に入ってきて、バス内のボランティアの仲間達が息を飲むような、いたたまれないあの空気は、とても忘れられない瞬間でした。

今回、機会をいただき、私達のお手伝いが多少なりとも力になれたかと思われませんが、まだ復興には、多くの人のボランティアが今後も必要である事を確信しました。この経験を生かすうえでも家族や知人、職場の同僚へPRしてゆきたいです。



[電力総連中部電力労組・藤森 英久]

参加の動機は被災地を見たい、できることを手伝いたいと自己満足の域をでませんでした。七ヶ浜以外の地域支援は復興方針が決まらずVC閉鎖しているとのこと。

ここは方針決まらずも全国から受け入れ綺麗な浜、松林の復旧に先ず取り組んでいる、との言葉が印象に残りました。メンバー全員で造った林道、七ヶ浜の復興を見に再訪したいと思います。

また今回のチームは目的ひとつにまとまる貴重な体験が出来ました。Oさんのように



かつこい生き方を魅せられるジジイ（失礼）を目指そうと思います。

最後にこのような企画運営をしていただいた連合長野、長電さんに感謝いたします。ありがとうございました。

[電力総連東京電力労組松本総支部・竹内 靖]



初日は個人住宅跡地の泥だし作業でしたが、スコップを使い土を掘り起こし、細かいガラスや陶器などを仕分けながらの作業で、地味ながらも復興に役立っていると感じました。

2日目からは菖蒲田浜海水浴場へ通じる林道整備でしたが、初日と比べるとかなりハードな作業で疲労感もありましたが、潮風と波の音に癒されながらの作業で、3日目終了時には約100Mにわたり整備をした林道を見て達成感と共に復興を実感いたしました。

[サービス流通連合西友労組中部支部・渡辺 茂男]

「ボランティア募集」の組合回覧を見てすぐに有休3連休の申込をしました。

総勢23名の中には一般参加が5名、中には何度も参加されている70歳の方もいて、その人柄やパワーに圧倒されました。

3日間慣れない肉体労働でしたが、基礎だけが残された住宅の土砂撤去を依頼された方の想いや、名前が書かれた幼児の片方の靴やぬいぐるみなどが防風林の中に散乱しているのを目にして現実の厳しさを知り、貴重な経験をさせて頂きました。



[全電線東京特殊電線労組・岡宮 得家]

震災からまもなく、7ヵ月になろうとしている、セヶ浜町のボランティアに参加をさせていただける機会を与えてくれた、連合長野、長電さんには大変感謝をしています。

今回の作業は、普段とは違う「力仕事」が多く、疲れましたが、充実した3日間であり、皆でまともに作業ができたと思っています。

今回、現地を見て、まだまだ震災の爪あとが残っており、7ヵ月経過しようとしている現在でも、厳しい状況との認識をあらたにしました。それと同時に、営業している建物などもあり、7ヵ月という時間の経過もあらためて感じました。

ボランティアセンターで、スタッフの皆



さん、各地から来ているボランティアの皆さんを見ていると、みんな明るく、元気があり、必ず復興できるのだらうと感じ、今回作業をした七ヶ浜町に、もう一度訪れ、復興したところを見たいと思いました。

この3日間は、本当に良い経験になりました。ありがとうございました。

[上伊那地協自治労伊那市職員労組・前田 是幸]

3月11日の東日本大震災の発災直後、給水車の支援で宮城県塩釜市へ第2班として災害派遣に行く予定でしたが、1班が派遣された途中で打ち切りとなりました。

その後、自治労の派遣なども仕事や身内の不幸などで参加することが出来ず、現地で苦しむ人たちのために何かボランティアをしたい、何かできることはないのかとそれ以来、自問自答して胸の奥で気がかりでいました。

行政のカンパのほか伊那市職労としてカンパの取り組みや風評被害に苦しむ福島の野菜の販売なども実施しましたが、今回、ようやく宮城県七ヶ浜町のボランティアに参加することができ、少し心のつかえが取れた気がしました。

その一方で、壊れたまま放置されている工場や住宅、流された住宅の残骸や置き去りにされた車で荒れたままになっている田畑など6か月過ぎた今もまだ手つかずの被災地の状況は、実際に肌で感じるとその津波の規模、被害の尋常でない大きさに改めて驚かされました。



まだまだ、ボランティアのやるべき仕事は残っています。もっと多くの方にボランティアに参加して肌で感じてほしいと思います。

ボランティアとして参加することで新たな出会いと貴重な体験をさせていただいた、長電バス、連合長野の関係者みなさんに感謝いたします。

また、ボランティアでともに頑張った参加者のみなさん、ありがとうございました。

[飯田地協JAM多摩川精機労組・小林 俊亮]

まず今回のボランティアに参加させてもらいましたことに誠に感謝申し上げます。

震災当日仕事から帰ったあとのTVを見たときの惨劇。その後、新聞やインターネットでいろいろな情報を見聞きしてきて、なにか被災された方の力になれるか、ずっと思い続けてたところ、今回のお話をお聞きし、微力ながら支援のお助けができればと思い参加させて頂きました。

現地では多くの人と協力（人海作戦）がないと、とても少人数ではこなせない様な土砂運び、（少人数では作業がちっとも進んだという状



況がみえない) をさせて頂き、みんなと協力し気持ちがいい汗をかかせてもらいました。

直接今回の作業ではありませんでしたが、ボランティアセンターでのマッチングの風景を見させてもらった時に、「ボランティアセンターのスタッフのお手伝い」「仮設住宅を廻るお話相手」の支援なるものもあると聞き現地のニーズはいろいろあるんだなぁと感じました。

高台にあるボランティアセンターから現場に通う途中に見えた、流されてきた家の二階部分や車がいたるところにまだ放置されていたり、瓦礫が撤去されてきつと新築だったと思われる綺麗な門柱。うず高くつまれた瓦礫の山の上のショベルカーが凄く小さく見えてしまほどとてつもない瓦礫の山、わずかの距離の差で高台に建っていたお宅は健在、ちょっとの差で明暗が分かれてしまっている現実。どれもこれも印象に残るいろいろな光景を見ました。

今回のボランティアでは大したことはできませんでしたが、いろんな人の少しずつの力でも、復興につながっていければいいなと思いました。

個人で東北のボランティアに行くにはハードルが高く、宿の手配、食事の準備、いっさいがっさい面倒をみてもらい貴重な体験をさせてもらったことに感謝申し上げます。

[飯田地協U I ゼンセン同盟旭松食品労組・佐野 嘉彦]

今回、当組合員を代表して、という気持ちで自分を奮い立たせて参加いたしました。

限られた時間の中で、微力ながらも充実した活動ができました。一方、復興には、人・地域・行政・政治…全ての力を結集した取り組みが、長いスパンで必要だと、あの風景を目の当たりにし、改めて感じました。

七ヶ浜町のボランティアセンターで常時働く皆さんの、笑顔が素敵で印象的でした。いつの日か、菖蒲田海岸に、子供を連れて行きたいと思えます。



[飯田地協自治労飯田市職員労組・遠藤 雅子]

3日間の作業をおえて、連合の成沢さんが、我々参加者たちを、防波堤へ海を仰ぐように誘導した。「初日にするべきでしたが、」と前置きされて。何が始まるのか神妙な面持ちで、待つ。



「あの日、この海からの津波がたくさん命を、家を町をすべてをのみこみました。これらの犠牲者に対して、黙とうを捧げたいと思います。」

肉体労働でともに汗を流して培った仲間たちと、3日間頑張り抜いた達成感で、高揚していた私は、虚をつかれはずかしかった。そんな大事なことを、忘れていたなんて。

海の波音が私の体じゅうを洗い流した後、成沢さんに感謝でいっぱいになった。人間らしさをかろうじて、持ちこたえられた気がした。

震災の直後に真っ先に動いたのが、連合だときく。その後も動員して、今回、私が参加する機会を得た。

困っている仲間があれば、駆けつける、そのたすけあいの精神が、連合の使命なのだと実感している。組織の中で、効率や、利益に追い立てられそうになるが、組合は、人間らしくあれ、と私に問い直してくれる。

[飯田地協自治労飯田市職員労組・林 関]

今回の復興支援ボランティアに参加させていただいたことに大変感謝しております。

元々、大学時代を仙台で過ごした私にとってもこの震災は大きな衝撃でありました。

しかし、その中でもたくましく復興に取り組まれている地域の方々、ボランティアの方々を見ると、逆に勇気付けられる想いがしました。

ボランティア先の現場は、まだ元の姿、元の生活になるまで長い時間が必要になると思います。少しでも自分が力になれることを見つけていきたいです。



[松本広域電機連合富士電機グループ労連松本地区支部・進藤 篤彦]

「救援ボランティア」を受け入れているセンターは、ほとんどが終息していると聞く。今回は、七ヶ浜町菖蒲田浜海水浴場の復興に向けた道の整備と、海水浴場としてのにぎわいを取り戻すものと聞

いた。住民が身の回りの生活を取り戻すまでの間、大衆が集まる場所の整備を行うことの大切さを実感した。

限られた時間で行う作業は、心なしか地区の方々のためになったのだろうか不安になる。「後1本杭を打てたのではないか。」悔いが残るが次回に生かしたい。



多賀城市社会福祉協議会作成DVDのメッセージより

駅員に「昨日一生懸命電車を走らせてくれてありがとう」
って言ってる小さい子達を見た。

駅員さん泣いてた。俺は号泣してた。

ディズニーランドでは、ショップのお菓子なども配給され
た。

ちょっと派手目な女子高生たちが必要以上にたくさんも
らって『何だ？』って一瞬思ったけど、

その後その子たちが、避難所の子供たちにお菓子を配
っていたところ見て感動。

子供連れは動けない状況だったから、本当にありがたい
心配りだった。

ホームで待ちくたびれていたら、ホームレスの人達から
「寒いから敷け」って段ボールをくれた。

いつも私達は横目で流してるのに。あたたかいです。

停電すると、それを直す人がいて、断水すると、それを直す人がいて、原発で事故が起きると、それを直しに行く人がいる。

勝手に復旧しているわけじゃない。俺らが室内でマダカナーとか言っている間、クソ寒い中死ぬ気で頑張ってくれている人がいる。

NHKの男性アナウンサーが被災状況や現況を淡々と読み上げる中、「ストレスで母乳が出なくなった母親がスーパーの開店待ちの列に並んでミルクが手に入った」と紹介後、絶句、放送事故のようになった。

すぐに立ち直ったけど泣いているのがわかった。

目頭が熱くなった。

千葉の友達から。避難所でおじいさんが「これからどうなるんだろう」と漏らした時、横に居た高校生ぐらいの男の子が「大丈夫、大人になったら僕らが絶対元に戻します」って背中さすって言ったらしい。大丈夫、未来あるよ。

あ と が き

東日本大震災から7ヶ月。

連合長野独自では2回目となる「東日本大震災復興支援ボランティア」は、5構成組織と3地協より参加いただいた総勢18名が無事ケガもなく任務を終了することができました。

今回は初めて女性の参加もありましたが、男女の区別なくボランティア作業を行えました。

ご参加いただいた皆さんと参加者を派遣していただいた構成組織・地協の取り組みに改めて感謝致します。

3日間の行程で実質のボランティア作業は2日でしたが、慣れない“肉体作業”であったものの参加者全員が“良い汗”をかけたと思います。

仙台駅近くのホテルから津波の被害を受けた仙台市東部・多賀城市・七ヶ浜町に向かうにつれ、流された自家用車が田圃にまだ放置されていたり、壊れた家屋などの残骸を集積して大きな丘ができている等、大震災の傷跡が至る所に残っていました。

長電観光では、「復興支援ボランティア」の募集を11月中まで行っています。募集期日は、11/3(木)～11/5(土)・11/11(金)～11/13(日)・11/25(金)～11/27(日)です。

宿と朝・昼食が確保されて「復興支援ボランティア」が体験できますので、個人でも、家族でも、グループでも申し込みされてはいかがでしょうか！

問合せ先 長電観光旅行センター ・ 026-232-8700 ※詳細は長野電鉄HP参照

最後に、「東日本大震災復興支援ボランティア」を企画していただいた長電観光と添乗員としてご苦労いただいた西澤係長に感謝と御礼を申し上げます。

2011年10月28日

連合長野事務局（成沢 勇次・戸井田 学久）